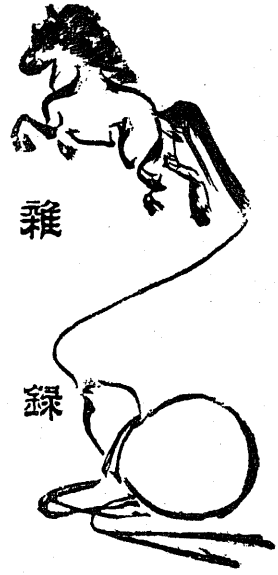
の耳邊を掠の去って居るのである。落語を聞いてア、面白かったと思ふと同時に消え失するが如く若くは夏の雨後の紅兒の天と同じ樣に。會々之を消滅せしめない所の人達は、隨分之が記憶に力める、そして博學の名を捕へんことを考へる。併も彼等は恰も食ひ續けに食って消化器を害した人の如き、夫である。要するに、たゞ智識の容量をのみ增加しやうとしないで、精確なる智力を增進せやうとしないからである。

（未完）

Wie Man's treibt, so geht es.

力むる所に方法あり



雜錄

保育要項

女子高等師範學校附屬幼稚園

明治三十三年文部省令第十四號小學校令施行規則に基づき女子高等師範學校附屬幼稚園に於ける保育の要項を定むること左の如し。

第一　組織

當園は年齡滿三歲以上小學校に入學するまでの幼兒を收容する所にして分ちて本園及分室の二とす。

本園に於ては完全なる保育の理論に則り經濟の許す限り一切の組織設備を完成し其他の方便をして

毫も遺憾なからしめんことを期し以て理論の完全なる適用を研究する所とす。

分室は保育の理論の範圍内に於てなるべく簡單なる方便を以て實際の適用を研究する所とす。

本園の幼兒定員は百二十名にして年齡によりて三組に分つ。

一の組　滿五年以上就學に至るまで。

二の組　滿四年以上五年に至るまで。

三の組　滿三年以上四年に至るまで。

分室の幼兒定員は六十名にして合して一組とす。

第二　保育の方針

凡そ幼兒は心身共に發達の最も旺盛なる時期に在りて將來に於ける二者の傾向は此時期に於て形成せらるゝこと最も多きものなれば、苟も其敎養にして一たび方針を誤りたることあらんか、永く不良の影響を心身發達の上に留め、生涯恢復し難き習癖を與へ救ふべからざる不幸の域に沈淪せしむることあるに至らん、是れ此時期の敎養最も必要なる所以にして確固たる一定の方針の下に適當の方法を考究せざるべからざる所以なり。因りて當園に於て定むる所の方針を左に揭ぐ。

一、幼兒をして健全なる身體の發育を遂げしむること。

一、幼兒の心情を涵養し且つ善良の習慣を得しむること。

一、幼兒の覺官を練習し其成長に適應せる心力の發達を遂げしむること。

此の如くにして幼兒をして將來道德的品性確立の素地を作らしめ、以て家庭敎育を補ひ併せて完全なる學校敎育を受くるに適當ならしめんとす。

第三　保育の方法

保育の方法は勉めて幼兒心身發達の度に適應せしめ、特に身體の健全なる發育を遂けしむることに注意し、漸次に心情の涵養心力の啓發を力め、且つ摸倣性を利用し實際の事例によりて自然に善良の行爲に誘致せしめんことを期す。

幼兒心身の發達は專ら其活動に由るを以て、保育に於ては之を適切に誘起運用せしむるを要す。

保育の方法として當園に採用する事項を遊嬉唱歌

談話手技とし、各事項に配當する一日中時間の割合は左の如し。

一遊嬉　凡そ三時間
一唱歌　談話　手技　凡そ一時間

第四　保育事項

一、遊嬉

遊嬉を利用して教育するは幼稚園の本旨なるを以て、遊嬉は保育事項中最も重要なる項目にして、身體の健全なる發達を助長せしめ、且つ其心情を快豁ならしめ、共同和樂の精神を養ふを以て要旨とす。

遊嬉は隨意遊嬉及共同遊嬉の二に區別す。

隨意遊嬉は危險害惡等を誘致する恐あるものを除く外なるへく幼兒をして任意に遊樂せしむるものにして主として自然の良性を發達せしむ。

隨意遊嬉をなさしむるに當りては專ら左の事項に注意するものとす。

1. 遊嬉の種類に注意して、幼兒の身體を損し、品性を害するか如きものを避けしむること。
2. 成るへく幼兒を指導して任意活潑に遊樂せしむること。
3. 他人を妨害凌駕し物件を破壞汚損する等の行爲なからしめ、且つ自己の使用せし物品はなるへく自ら處理する習慣を得しむること。

共同遊嬉は幼兒をして共同して遊嬉をなさしむるものにして、通例室內に於てし、或は遊園に於てし、共同によりて生する興味を起さしむ。

共同遊嬉の種類は左の標準によりて選擇す。

1. 幼兒の身體四肢の運動に適當せるもの。
2. 幼兒の理解力に適當せるもの。

共同遊嬉をなさしむるに當りては專ら左の事項に注意するものとす。

1. 同一の唱歌に伴ふ遊嬉と雖も必しも常に其形式を一にせす、幼兒の年齡と發達とに應して、之を變化し簡單複雜其度を得しむること。
2. 遊嬉の形を美ならしめ、幼兒の動作を齊整せしむることは必要ならすとせされとも、徒に形式にのみ拘泥するときは遊嬉を以て却て勤勞の苦痛を感せしめ、爲に遊嬉の精神を失ふに至ることあるを以て、幼兒をして衷心より遊嬉の事項

に詞情を起さしむること。

3. 規律と自由とは相待ちて活動を調節するものなるを以て、遊嬉に於ては幼兒相當の規律に服すべきことを悟らしむると同時に、其範圍内に於てはなるべく自由活動の餘地を存せしむること。

4. 幼兒の自ら發表する動作は最も自然的なること多きを以て常に注意して之を觀察し遊嬉の形をしてなるべく幼兒自然の動作に近接せしむること。

二、唱歌

唱歌は幼兒の心情を快豁純美にして德性涵養の資たらしめ、聽覺發聲機關及呼吸機關を練習して、發音の自然的發達を助長せしむるを以て要旨とす。

唱歌の材料は其歌詞樂曲共に極めて平易なるものを主とし凡そ左の標準によりて選擇す。

1. 歌詞は古語雅文等より成るものを避け、主として談話躰若くは普通文躰にして幼兒に理解し易きもの。

3. 歌詞の內容は幼兒想想の範圍內にありて興味を惹起するに適するもの。

3. 樂曲は音域餘り廣からず、凡そDよりDに至る間にあるものとし、音程は簡易にして拍子は普通4/4或は2/4に屬するもの。

唱歌をなさしむるに當りては專ら左の事項に注意するものとす。

1. 單に歌詞のみを以ては十分に幼兒の想像力を喚起すること能はざる場合あるを以て、歌詞の意味を現はせる繪畫若くは適當なる實物を多く利用すること。

2. 唱歌の種類によりては適當なる動作を聯結せしめ、以て其理解と興味とを增さしむること。

3. 凡そ幼兒の心意活動は時々境遇によりて變化するものなれば、常に其狀態に注意して之に適應せる唱歌を唱はしむること。

4. 時々音程を唱はしめ以て特に發聲機關及呼吸機關の練習をなさしむること。

5. 幼兒の發達に應して發音の混亂を矯正することを力め、又咽喉口唇の開閉を十分ならしめ、常に美聲を以て唱ふ習慣を得しむること。

6. 唱歌をなさしむるに際しては發聲を自由ならしむることに注意し、なるべく自然の姿勢を保たしむること。

三。談話

談話は幼兒の心情を涵養して德性啓發の資たらしめ、觀察注意の習慣を得しめ、言語を練習せしむるを以て要旨とす。

談話は幼兒の心情に適切にして、其實際の境遇に近きものとし凡そ左の種類に分つ。

1. 寓言及童話
2. 事實談話
3. 偶發事項

談話に於ては主として左の事項を授く。

1. 自己に關係せるもの
   (い)自己の所有物　所有物に關する知識及其取扱ひ方
   (ろ)自己の身體　身體に關する知識及其取扱ひ方
   (は)自己の精神　正直勤勉勇氣等の諸德
2. 家庭に關係せるもの
   (い)父母　父母に對する心得
   (ろ)兄弟　兄弟に對する心得
   (は)婢僕　婢僕に對する心得
   (に)家屋器物　家屋器物に關する知識及其取扱ひ方
3. 社會に關係せるもの
   (い)長上朋友　長上朋友に對する心得
   (ろ)日常親近の事物　日常親近せる事物に關する知識
4. 自然に關係せるもの
   (い)動物　動物に關する知識及動物愛憐
   (ろ)植物　植物に關する知識及植物愛護
   (は)礦物　礦物に關する知識及其取扱ひ方
   (に)其他自然現象　自然現象に關する知識感情

左に記するか如き事項を現はせる談話はなるべく之を用ふるを避く。

1. 恐怖の情を激發せしむるもの
2. 殘酷なる所業を現はせるもの
3. 惡意の成功を現はせるもの
4. 其他修身に關する反面的事例を現はせるもの

談話に於ては專ら左の事項に注意するものとす。

1. 躾け方に關する談話はなるへく實際の事例により時機に應して之を授け、幼兒に相當せる言語動作に慣れしむること。
2. 自然物自然現象及人工品等に關する談話はなるへく幼兒の直覺し得へきもの、又は思想の範圍內にあるものに止めて、專ら觀察注意の力を得しむることに注意し、其方法は隨意遊嬉の際幼兒の觀察する事物につきて時に觸れ機に臨みての談話を以てし、或は寓言童話事實談話等を授くるに際し、其中に現はるゝ事項につきての問答等を以てすること。
3. 談話は完成せるものとして之を授け、幼兒の心情に影響して之を涵養し豐富ならしむるを以て主とし、修身開智等に關して特に其事項を抽出して授與するは之を避くへきこと。
4. 談話はなるへく幼兒の直覺に訴へ、其想像を喚起し易からしめんかため繪畫實物標本等を多く利用すること。
5. 幼兒の心意は尙未た概念構成の力發達せさるを以て强て抽象作用を働かしめさること。
6. 幼兒をして自ら語らしむることに注意し、以て漸次思想發表の方法に慣れしめ且つ發達に應して發音の正當を得しむること。

談話は保育事項の一として特に時間を定めて授くるものなりといへとも、其他の事項に於ても必然に相伴ふものなれは、他の事項を授くる際に當りて常に上揭の主旨に由りて適當なる談話をなすへきものとす。

四、手　技

手技は手及眼を練習し、工夫想像の力と美的心情とを養ひ、心意發達に資するを以て要旨とす。手技は專ら幼兒の自然に適應し興味を惹起するに適したるものを選擇して凡そ左の種類とす。

1. 六毬
2. 積木

積木は左の三種に分ちて各組に配當す。

	正方体	長方体	方体	大三角柱	小三角柱	柱体
第一	四	四				
第二	四	四	四	四		
第三	四	四	四	四	八	四

3. 板ならべ

板ならべには左の種類の板を用ふ

形	色
正方形……表	白
正方形……裏	赤
二等邊直三角形……表	赤
二等邊直三角形……裏	緑
不等邊直三角形……表	緑
不等邊直三角形……裏	緑
二等邊鈍三角形……表	樺
二等邊鈍三角形……裏	青
正三角形……表	黄
正三角形……裏	青

4. 箸ならべ

箸ならべは金屬製又は木製の箸を用ひ其長さを五分一寸二寸三寸とす

5. 環ならべ

環ならべは金屬製の環大中小の三種とし更に此三種の全環半環及中環の四分の一のものを用ふ

6. 紐おき

紐おきは絲或は打紐を用ふ。

7. 貝ならべ

貝ならべは小貝を用ひ或は種子小石等を用ふ。

8. 畫き方

畫き方は始は石板を用ひしめ進みては紙面に畫かしむ。

色彩は最も幼兒の興味に適合するを以て其練習のためには色鉛筆を用ひ、漸く進みては簡單なる繪具を用ふることあるべし。

9. 縫取り

縫取りは絲と針とを用ひて臺紙に簡單なる形を縫取らしむ。

10. 紙きり

紙きりは最初は諸種の形狀の紙片を與へて臺紙に貼付せしめ、其貼付方に熟するに至りて剪刀を用ひて自ら形を剪出せしむ。

11. 紙ぬり

12. 紙くみ

13. 紙たゝみ

紙たゝみは方形三角形圓形等の色紙を與ふ。

14. 豆細工

豆細工は白豌豆と纖竹とを用ふ又麥藁を加へ用ふることあるべし。

15. 粘土細工

粘土細工は粘土を用ひ五月より十月に至る間に

之を授く。

幼兒の發達に應して與ふる手技の種類は凡そ左表の如し。

手技をなさしむるは凡そ左の方法による。

1. 幼兒をして各自自家の工夫によりてなさしむるもの。

2. 談話唱歌等其他の見聞によりて幼兒の得たる觀念を啓發指示してなさしむるもの。

3. 手本若くは實物を示してなさしむるもの。

幼兒をして自ら思考想像の力によりて活動せしむることは教育上必要なる條件なり、されは手本若くは實物を示してなさしむる方法を用ふるに當りても强て幼兒の興味に反し、其活動を抑制せさらんことに注意するものとす。

手技に於ては專ら左の事項に注意するものとす。

1. 思物は諸種に區分せらるといへとも其使用に際しては一律の形式に拘泥することなからんかため、各種必しも常に別々に使用せしむるを要せす、便宜相混用せしめ或は其取扱ひを多方的ならしむること。

2. 思物に屬する名稱の如きはなるへく幼兒に親近なる形を以て稱へしむること、例は積木に於て、は正方体をマシカク長方体をナガイシカク方体をウスイシカク三角柱をサンカク方柱をシカクノハシラ邊をフチ角をカド又はスミと稱するか如し。

3. 色彩は專ら美的感情を涵養するに適するを以て其配合に就きては特に注意すへきこと。

4. 色彩は正しき名稱により稱へしむへしといへとも、各種の間色に對しては其實際上の區別を知らしむることに止め、强て嚴密なる名稱を附せしむるに及はさること。

5. 色彩を知らしむるには、なるへく幼兒に親近なる諸種の物体と比較せしめて自然に其名稱を知得せしむること。

各組に於ける手技配當表

	三ノ組	二ノ組	一ノ組
積木	第一期	第一期	第一期
同	第二期	第二期	第二期
同	第三期	第三期	第三期
同			
同			
同			
同			
同			
六毬			

				畫き方					紙たゝみ		
板ならべ			貝ならべ	同					同		
同	箸環ならべ		同	同					同		
同	同	紐おき	同	同					同	豆細工	粘土細工
同	同	同	同	同		紙きり			同	同	同
同	同	同	同	同		同			同	同	
同	同			同		同			同	同	粘土細工
同	同			同		同	紙おり		同	同	同
同	同			同	縫取り	同	同	紙くみ	同	同	

●注意　積木は第一第二第三の種類に從て木片の數を定めたりといへとも必しも常に其數に從ふを要せす其種類の範圍に於て幼兒の狀態に應し適當に配分するも妨なし

板排へは別に數を定めす時に隨ひ機に臨みて適宜に配當するものとす

箸及環は或は別々に與ふることあり或は相混用せしむることあり其數も亦適宜に分ちて與ふるものとす

三月をやよひといへること

せく生

鎌倉時代の歌人にして、拾玉集といへる名高き歌の集を著はされたる、大僧正慈鎭和尚は、三十一文字の歌の名人たりしのみならず、當時流行の今樣の作者としても亦名高かりし事、誰しも言ふ處なり。就中其の春夏秋冬四季を歌へる四首は小學唱歌集に載せて、可愛ゆき兒童の口々にまで唱へられつ。今其の春を歌へる一首を記さば、

春のやよひのあけぼのに、
四方のやまべを見渡せば、
花ざかりかもしらくもの、
かゝらぬくまぞなかりける。

唱歌集は「かゝらぬ峯こそなかりける」
と改めたるもの。

これぞやよひの名高き歌と、七百年このかたの歌ひ物たりしも無理ならず。舊暦ならぬ今月、尙

この光景を迎へざるも、やがては眞のやよひなり何處もおなじこの長閑けさは、年中のいと心地よき樂しき時期、一生にたとへて其の少年期とも稱へつべく、春宵一刻、價千金の句、亦念頭に躍るなり。

尙今月をやよひといひたる例の二三を諸書よりぬけば

敏行朝臣の歌に

暮れて行く彌生のそらをながむれば
　八重の霞をかへるかりがね

古今集の中の歌のはじがきに四つあり。

彌生にうるふ月のありけるとし詠ける（伊勢）

櫻花春加はれる年だにも人の心に飽れやはする

彌生に鶯の聲久じう聞ざりけるを詠る（貫之）

鳴留る花しなければ鶯も
　果は物うくなりぬべらなり

彌生のつごもり方に山を越えけるに山川より花の流れけるをよめる（深養父）

花散れる水のまに〳〵とめくれば
　山には春も無くなりにけり

彌生のつごもりの日花つみより歸りける女共を見て詠める（躬恒）

留むべき物とはなしにはかなくも
　散る花ごとにたぐふ心か

彌生のつごもりの日雨ふりけるに藤の花を折りて人に遣はしける（業平朝臣）

濡れつゝぞしひて折りつる年の內に
　春は幾日もあらじと思へば

さて如何なる意味あつて、三月は彌生といはれたるかは、彼の清輔朝臣が、「三月風雨あらたまり

て、草木いよ〳〵生ふる故にいやおひ月といふを訛れり」と考へたるを初めとして、森宮龍翁の惠美須草に、「三月をやよひと稱ふるは、彌生と云ふ意にて、春風の氣を以て、山木草ともにいや生ふる時なれば、いやおひ月と云ふを略して、やよひといふ云々」といひ、本居宣長先生が、「凡て月日の名ども、昔より說どもあれど、皆わろし。（生考ふるに、皆わろしといふは酷に過ぐ）其中にたゞ三月を彌生なりといふ類のみはよし云々」と言はれたるを見ても、其の語意の疑ふ所なきを知る。

終に臨んで、彌生の異名の歌にあらはれたる面白き三四を記せば、

夢見月（俊賴朝臣）

櫻ちるはつもの山の夢見月
あらしの花の雪のなかやと

花見月（後鳥羽院御製）

薄みどり空もひとつの花見月
なべて心もあくかれぬらむ

櫻月（定家朝臣）

なべていま盛とみゐて櫻月
うすくもりなる四方の山のは

春惜月（家隆朝臣）

數ならぬ身とも思はす日をかさね
くれゆくころの春惜月

歸省日記

小林雨峰

ふらりとわが僑居を出て、鄕里古河に歸りしは都の空雪いたく降りいでし、立春の前三日と云ふ

の日なりき、凍れるが如き雲は愈〻雪を醞して、夜に入りて尙ほ深く降りしき、朝まだき障子明くれば一面の銀世界、小さき庭先きに十文字に枝を横たへし梅の梢に漸く蕾を破りし紅梅の葩、眞白き中に麗はしう咲きたるが疎らに點するけはひのすぐれて眼に入りぬ、雪の梢に散りて僅かばかりうす綿の如きを纏ひたらんが如くになりては更らにもうれしく、小鳥來りて梢を搖かせは彼方是方の雪はさらにこぼれぬめり、かくても花のみ鮮かに笑ふが如くにて、一片だに落ちず、剛情なるうちに梅の精のしるく見えて顏、手寒うなるも厭はで眺め入りぬ、

節分の夜に撒豆を爲す、われは年男となりてとすゝめられつ、「福は外鬼は外」と大聲に呼ばゝりしに姪なるとみ女、「福も外鬼も外だと可笑ねー」と妙な顏をしてわが顏を覗く、「福も鬼もいらないからさ」と答ふれば「可笑いんだねー」と今度わ母の方を向く、われは廿八粒、とみ女十二粒をつまみて、ぽり〳〵と嚙み、われ小人島に福の神か鬼千疋をつれていつて、戰する話しを爲せしに、とみ女は嬉がつて笑ふ、慰にもつかぬをなれども故園の樂みはかくの如きところにありと思はれ、興いよ〳〵深くなりぬ、

心あしかりしは隣り裏に住む、慾張り婆と其の養女とのいさかひなりき、其對話はいと滑稽なりと云はんかたよろしかるべき、

「そんなにおれが邪魔なら、さつさとどうにでも形付けてしまへ、」婆の言なり、

「おれには、そんな權利はねい默つていやがれ」

養女の言

喧嘩は二日とつゝきぬ、婆なる人には立派（？）の息子ありて、一家を爲しつゝあるに、婆なる老母は勝手に家出して養女と別居し居るなり、而かもまた養女には別に若き夫あるなり、さるにてもこのとき其の夫はこの喧嘩を見て居りて一言たになし。夫婦も夫婦だなー、親子も親子だなー、あゝ手がつけられぬと喇ちしはそこの下女の獨語なりき、

うれしかりしは、わが家の前隣りの指物師の家庭なりき、主人は職人の事なれば、文字なきは定小遣帳を小便帳とかいて濟まして居るなれども、召し使ふ四人の職人との間の温きをは他にも稀なるべし、舊暮のをなりとか、

いかにも不景氣にて、主人夫婦それとは顏色にはいださねど。商賣のいかにも不景氣にて困じ果てつゝあるを見て、職人どもは皆何れも年こそ若けれ、主人ありてかくも奉公しきたりたるなればいまこそ忠義だてすべき時なれとや思ひけむ、十七八ばかり年かさなるが三人のものに相談しつゝ互ひに暇を貰うて家に歸らんはいかにと、云ひ出てゝ遂に、釘なりに何か書き認め主人の許に差し出せしに、主人心よく讀み了り、涙を浮べて、かゝる心掛けにてはわれは心ろいかばかり嬉しきか知れず、さりながら、さればとてお前たちがこの節季に家に歸りたればとて、それにては親達も直ぐにも困るべく、またわれとても、そうさせて心地よき筈なし、と夫婦にて口を揃へて押し止め、自分たちは例令食べるものを減してなり、心配はかけぬゆゑ、稼いてくれと懇ろに訓し、やかて一二日すぎて、正月の仕着せにと主人は心つかひし

て、股引を銘々に新調しやらんとて、足袋屋に誂へしに、足袋屋にては銘々の寸方を取りに來りぬ然るにこゝに、また四人の職人どもは、何とて前にすら、堅くつゝまやかにせではと心がけ居る折りとて、春のものなぞ頂きてはすまぬと、どうかよしてもらひたふ御座りますと斷りしも、主人はそはあまり堅すぎるとなり、かつ世間の手前もあればと言ひ含めて、うれしくも、初春を迎へたりとなん、

小さき村里、文字なき人ながらに、かくも家庭のあたゝかきあるに、われは深くも涙に咽びぬ、教育ある人々の家庭だに、これに及ばぬ家庭のいとも多からむ、さても世の進み開くると云ふなるところに、春たちかへらぬ、寒き冷き胡沙吹く風の荒み狂ふが如きあるは、嘆きてもあまりあらずや、

左の一篇は在米國伊藤せい子女史より會員野口幽香子女史へあてゝの通信を乞ふて登載したるものなり。

キングストリート幼稚園

（是は此園の名に非ず此街に在る故假に名付く）

何某なる人其子と共に旅行せし時、船の沈没にあひて子と共に死す、此幼稚園は其人の遺産を以て此二人の紀念にとて設けられたるなり。此地にては幼稚園は貧しき人の子供のためにとて設けたるものゝ如く、萬事慈善的性質を帶ぶ、故に食物等をも幼稚園にて與へて營養の不足を補ふ。

お茶の水幼稚園の遊嬉室を正方形にした位の室にて五組の幼兒を保育す。一組の兒數八人より十二人位まで。五尺に四尺許の卓子の縱横に線を引きたる物の周圍に各兒別々の椅子に倚る、私の行きし時は話の時間なりしと見え、各組とも種々な

る話して居たり。間もなくピアノの合圖にて一組ゴヽ立上り、各自分の椅子を持ち、不整ながら列をして室の中央に記しある楕圓形の太き線に沿ふて椅子を置きて着席す。各組の保姆も亦其中にまじる、此時までマ！チを彈じ居りし保姆長も席に着き、植物の種子より芽を出す話を實物に就てなす。（空き鑵にスポンジを入れ、何の種か分らざりしが小さき種子を蒔き水を十分にして暖き處に置きしと見え悉く芽を出せり）夫より全兒の中より十人許を中央に出し、種子から追々に芽を出す樣を遊嬉にてする。芽の出た時外の兒六人許出でゝ水を注ぐまねをなす、此間外の兒は各此遊嬉の歌をピアノに合して唱ひ居るなり。

次に鳥が玉子よりかへりて成長する樣を繪にて話す（尤室内に小鳥が飼つてある故實物にても知りをるなるべし）此遊嬉をする時保姆が三人出でゝ親鳥となり各三人許の兒即ち玉子を抱へる他の兒の唱ふにつれ卵かへりてひよ子となり次第に飛ぶ樣を示す。

次にヤツが生れて成長する事を繪に就て話し、ヤツはよき子供なりしや否や等問ふ、凡ての談話中問答法による事勿論なり（此週間はヤツが磔刑に處せられて死し三日目に再生せりと云ひ傳ふる時なりき）總ての合圖はピヤノによれども、遊嬉の終り等には保姆長が首にかけゐる器にてなす、此器はにつける製の三角の管にして、之れと同し質の四五寸位の棒とをリボンにてつなぎ首にかけをり、必要に應じ其棒にて三角形を敲くと小さき時計の如き音を發す、此音にて兒童は席を出入す。是にて遊嬉を終り、始の如くにして各の場所に歸

る。これより後は各組別々の仕事を授く。

或組は上圖の如き(圖は略す)鳥をかいた厚紙を各兒に渡して切りぬかせる。次の日か或はいつか是をゑどらせると云ひねたり。ゑどるに色鉛筆を用ふ。此鉛筆は普通と異り、心ばかりにて、小さき筒に二三十本種々の色をとり合せて入れおき、各の求むるに應じて好みの色を渡す。折れて削つるせわなし。又或組は四寸に六寸位の畫紙二枚を二つ折りにし、二三分計の巾の桃色のリボン長五寸計のと渡して綴ぢさしむ孔は既に明きをるなり。是も此日は是丈にてをはり、次の時鳥の巣に卵の三つ四つなる所や、是がかへつて雛子になる樣や、成長してとぶ樣等をかゝせるなりといへり。又他の組にては是と同じ事なれど本は既に出來上りをり是に植物の種子より芽を出して追々繁殖する樣をばゑがゝせねたり。

極々幼稚の者は一組となりをり、彼の恩物の球をば卵とか鳥とか云ひてもてあそびねたり。

保育は是丈にて止め、此幼稚園の臺所を見る。中央に化學の實驗室にてもありそうな長きテーブルあり。是にはむかふとまへとに小さき引出し數個ありて、中に牛乳屋の用ふる如き罐と三寸に四寸位の布を三四枚合せたる布巾とあり、是は罐を火にかけて下す時に用ふるなり。罐には度を盛る、之は例へば米を一番目の筋まで入れ、水を二番目の筋まで入れよと命する便利の爲に設けしなりと。

此外一寸したクックをするに入用なる物を備ふ。

テーブルの上にはオイルストーブ十數個あり、年長兒をして晝飯の時みやすき煮燒をさせる爲な

りといひゐたり。

晝飯は總て幼稚園にて供給す、時としては或兒の家より今日は此兒の誕生日故、皆さんに上げて呉れとて食物を持ち來る事あり。

此日も（三月十八日）或兒の誕生日なりとて蜀黍を一升はどもち來れり、晝飯の時いりて與ふるならん。臺所の次に浴室あり、小兒用浴器と洗面臺とあり、汚れをる兒は湯をつかはしてやる。

此處に一個の戸棚あり、藥器をおく一日一同看護婦見まはりて藥用せしむべきものには是を與ふ。

保姆は前に保姆長と云ひしが一人專任にて他のは保姆練習生にて實地を練習しつゝあるなり。

保育時間は九時より二時まで。

保育室に沿へる廣き椽側の一隅に、高四尺間口四尺奥行三尺許の小さき家あり、内に寐臺、椅子卓子等の家具を置き、人形を人と假定して普通の住宅の樣を寫せり、此室内の事は一切兒童のなすにまかせ、保姆は是を指導するのみなりと。

或組の保姆已が組の兒を率ゐて外に行きしが、やがて此地の名産バナ、一袋を買ひてかへり來れり、晝の食事に用ふるなるべし。

此幼稚園の幼兒の種類は雜多にて、土人、白人日本人、支那人、雜種等なり。保姆は日本人をば最よしといへり、何となれは土人は怠ける癖あり、白人はあまりに氣早にて落付ず、支那人はあまりに落付すぎて困る、獨日本人は中庸を得、仕事も怠らず、沈着なれども、グヅ〳〵せず手先も器用なりと云ひゐたり。